

その後の「飯沼慾斎」研究

水野瑞夫^{a)}，遠藤正治^{b)}

要約：1984年に出版された生誕二百年記念誌『飯沼慾斎』以後、飯沼慾斎に関してなされた研究のうち、植物関連の三研究を解説する。慾斎が残した「サビナ」の標本が分析され、その原植物が同定された。慾斎自筆の模写図の原本が同定でき、『草木図説』の成立過程の一端が明らかになった。慾斎の初期の図集『本草図譜』の出典の一つとして『東秀南畝識』の存在が明らかとなった。この書は美濃地方における本草図譜の最初期の作品として注目される。

**A Study on Yokusai Iinuma after the Commemoration Volume
of His 200th Birth Anniversary**

MIZUO MIZUNO^{a)}, SHOJI ENDO^{b)}

Abstract : After the book entitled Yokusai Iinuma for the Commemoration of his 200th birth anniversary was published in 1994, some studies on him have been done. Among them, three papers on plants are herein to be explained away.

- (i) 'Sabina' specimen which Yokusai had prepared and left behind was analysed and then the original plant of it was identified.
- (ii) The original sketch-book drawn by Yokusai himself was identified and a bit of making-process of Soumoku Zusetsu was clarified.
- (iii) Touyuunanboshin was discovered and found to be one of source book of Honzou Zuhu, his early sketch-book, This book invites attention as one of his earliest piece of Honzou Zuhu in Mino Country.

飯沼慾斎（1783-1865）は江戸末期に生きた大垣の医者であり科学者であった。その活躍は多様であり、彼は大垣俵町で漢方医として医業を継ぎ、医学書の翻訳「ショメール脈説」、人体解剖、種痘などの蘭方医学の研究と実践に奔走した。また、本草家としては『本草図譜』（草部、木部、虫部、介部、魚部、禽部、獣部）『南勢菌譜』『南勢魚譜』『南海魚譜』『南勢海藻譜』、鳥獣図などの著作があり、その展開の結果と言える植物研究における成果は慾斎を植物学者と呼ばせた所以である。伊吹山をはじめ各地で採薬し、多くの植物さく葉標本の作製、植物目録（『根尾山所産草木』）、顕微鏡の入手による植物解剖図の作製は結果的に近代植物図鑑『草木図説』の完成に至っている。また火薬などの研究や写真研究など化学者としての面を覗くことができる。

a)岐阜薬科大学

〒502 岐阜市三田洞東5丁目6-1

b)岐阜県立華陽高等学校

〒500 岐阜市大縄場3丁目1

a)Gifu Pharmaceutical University

5-6-1, Mitahora-higashi, Gifu 502, Japan

b)Kayoh High School

3-1, Ohnawaba, Gifu 500, Japan

悠齋に関する総合的な研究は、生誕200年を記念して「飯沼悠齋生誕200年記念事業会」が組織され、また同時に悠齋研究会も組織されて行われ、その研究集会は1982年4月の岐阜薬科大学における第1回以後隔月で行われている。その研究成果は『悠齋研究会だより』にまとめられ、今ではその刊行も76号に至っている¹⁾。事業会は1983年に生誕200年記念式典を大垣市で開催し、その際記念出版物『飯沼悠齋』が作成されている²⁾。この記念誌は各分野の専門家により悠齋の業績を分析したものであった。植物に関する業績の分析に用いられた資料には、江崎美奈子宅に残されていた『草木図説』稿本があった。また、国立科学博物館には飯沼悠齋が採集して作った1000枚を越える植物標本があった。悠齋研究会において、疑問点が見つかりと逐次検討され、その成果が主に『悠齋研究会だより』に要約報告された。それ故、研究会の歩み自身が「その後の悠齋研究」と考えることができる。

そのうち、飯沼悠齋製作の押し葉標本である「サビナ」の原植物が従来想定されていたセコイヤでないことが確定されたこと、同じく飯沼悠齋が模写した図版の原本が発見され、悠齋の『草木図説』製作の根拠ではないかとの新事実が判明したこと、これまで『草木図説』製作前の作品であるら悠齋の『本草図譜』に関しては何ら研究が進められていなかったが、これの出典とみなせる同郷の「毘留舎耶谷」の膨大な本草図が見つかったこと、以上の三研究は、『草木図説』の成立を考察する上でもっとも重要であると思われる。そこで、これら三研究について解説を交え総説を進める。

I. 飯沼悠齋の標本「サビナ」³⁾

飯沼悠齋生誕200年記念事業を行っていたある日（1982年7月25日）、悠齋が描いたと思われる花鳥図や、押し葉標本を見るために飯沼俊雄宅を訪問した。そこで、悠齋が残したと推定される「サビナ」の標本を発見し、当時その形態からセコイヤと推測した。さらに、悠齋翁が山本亡羊に同定を依頼した文面も見つけセコイヤの日本への導入時期とからんで貴重な資料であると予感し、今後の研究を待つことにした⁴⁾。なお、この資料に関しては俗に「サビナ」標本がセコイヤと同定されたのでセコイヤは安政二年以前既に尾張に舶来していたことになると発表した⁵⁾。悠齋が残した押し葉標本の大部分は科学博物館に収蔵されていて、これらは所謂完全な標本と言えるが、その他にサビナのような断片的な押し葉標本も見られ、飯沼俊雄宅のものと同様、『草木図説』稿本の中にも挿入されたものがあり、かなりの数の断片標本が存在すると考えられた。

「サビナ」標本の形態

飯沼俊雄宅の標本は日本紙に包まれ、その包み紙には悠齋の手跡で「渡辺家之秘蔵舶来サビナと称し来候品、サビナ之族二而ハ無之候とは存候得共、其産地も其名共未詳候、御考可被下候」と墨書し質問がなされている。これは山本裕室宛のものであることは、裕室の筆跡と推定されるコメントが認められたことから推定された。質問の後には「当地花戸モサビナト云真物アラス外国傳載ナラン、小一枝御モラヒ申上候」とある。悠齋は常に山本裕室（山本讀書室）に標本を送り鑑定を依頼していたことは科学博物館所蔵の標本からも明らかである。この「サビナ」も同様に鑑定を依頼したものである。この中で「渡辺家」とは尾張藩の家老渡辺又日庵であろう。又日庵は尾張嘗百社物産会への主要な出品者であり、弘化四年平林荘を訪れ、キンサンジゴを写生している。また悠齋は、安政二年五月下旬に又日庵の花圃を訪ね、ニクズクを写生している。「渡辺家之秘蔵舶来サビナ」は、この時に入手した可能性もある。なお、悠齋の患者には別に渡辺姓を持つ美濃北方の豪商・渡辺佐左衛門がいた⁶⁾。佐左衛門も「舶来サビナ」を入手することができる経済力を備えていた人物であり、必ずしも又日庵から入手したとは断定できない。「サビナ」は悠齋の著した『草木図説』木部巻8に解説と図が載せられている。これは北村先生によって「未詳一種、サビナ花戸称」に対し、ヒノキ科の*Sequoia sempervirens* Endlicherと同定され⁷⁾、明治中期に渡来したとされるセコイ

ヤは江戸末期に入った可能性を指摘されている。これは大変重要なことである。これを証明するためには、まず入手経路を推定しなければならないが、標本をよく見ると葉が条形で螺旋状に配列し、葉基部がねじれていないなどの特徴があり、セコイヤとは少し形態が違うのではないかと思われた。裸子植物の葉の内部形態には大きな特徴があり、分類に応用されているため、一度慾齋のサビナの内部構造を確認することが先決であると考えた。飯沼俊雄氏の好意で標本の一部を早速解剖することができた。解剖は岐阜薬科大学薬草研究室の田中俊弘と当時大学院生であった酒井英二⁷⁾が担当した。「サビナ」葉の横切面を剖見すると、維管束は葉の長軸方向に対して垂直に位置し、表皮細胞の内側には繊維が見られた。一方、セコイヤ *Sequoia sempervirens* は維管束は正常であり、表皮細胞の内側には繊維群が無く、明らかに資料である「サビナ」とは異なっていた。そこで以後は内部構造が一致するものを探す必要がでてきた。この研究を推進するに当たって、サビナ自身の日本における位置的な調査と、サビナと同じ内部構造を有する裸子植物の収集は邑田仁が担当した。

サビナ *sabina* は、古代イタリア中部の地名に由来するラテン名であり、中国や日本の本草書には確認ができない。サビナは江戸時代にはもっぱら蘭方医の間で主に通経薬として用いられていた。慾齋の蘭学の師である宇田川榛齋と榕庵の著書『遠西医方名物考』36巻（文政5-8年刊）はサビナを扱った最も古い文献の一つであり、その巻19には、サビナの音訳から薩毘那の漢字名を当てている。ラテン名はジュニペリス サビーナとし、オランダ俗名はセーヘンボームを挙げてその形状も記して居る。

「是レ一種ノ灌木ナリ、林娜氏はヲ杜松ノ第九種ニ属ス。二種アリ、第一種ハ葉御柳葉ニ似テ勁硬、尖刺ノ如シ。二葉宛着クコトニ針松ノ如シ。香氣アリ。第二種ハ葉側柏葉ノ如シ。共ニ四時緑、味辛苦。花杜松花ノ如ク猫児ニシテ細線ノ如ク枝梢ニ生ス。但シ花ハ実トナラズ実ハ別ニ幹枝ニ生シ杜松実ノ如シ。始メ緑、熟スレバ青黒或ハ黯赭色トナル。内ニ数核ヲ蔵ム。稜アリ味辛、香氣アリ。或云、実ヲ結バザル者ヲ雄木トス。実ヲ結ブヲ雌木トス。木材赤色ヲ帯ブ」

また、その産地として、ポルトガル、イタリア、シベリヤその他アジア地方を挙げて、オランダでは園に栽培するとしるされている。これらの『遠西医方名物考』の記述は、『ショメール』『ウエイマン』『イペイ』などの蘭書によったものであり、必ずしも榛齋や榕庵ら自身の観察記録ではないが、しかし当時すでにリンネの分類に従った正確な記載と考えると良い。また巻36に掲げられている「サビナ」と称する図は明らかにジャクシン属 (*Juniperus* L.) であって、飯沼家所蔵の「サビナ」標本とは異なっている。榛齋はさらに「此樹和漢産未ダ詳ナラズ、但シ本邦ニ舶来ノ第一種ヲ栽培スル者多シ」として、すでに類似品が多く渡来していたことを伝えている。「サビナ」に関して渡来の状況を考察したものは少ないが、次の記録は「サビナ」の渡来を考察するのに必要なものである。

①『読書室物産会目録』巻43⁸⁾には安政3年5月21日の読書室物産会へ、江馬権介(榴園)が、「サビナ蛮種」を出品したことが記されている。これは目録の記載順からみて、押し葉標本でなく盆栽であったと推定されるが、図はない。

②『天保年度蠻舶来草木銘書』(安政6年3月)⁹⁾の木之部にはサビナは葉形カヤに似て、至って小葉、やわらか、異形なりとある。

③馬場大助(資生圃)著『群英類聚図譜』後編(嘉永5年序)¹⁰⁾の巻4には、サビナ イユペリウス セーヘンボーム近世阿蘭陀持渡り本邦ニ栽ユ、葉の形チ檜柏ニ似テ嫩葉ハカマクライフキノ如ク老スレハ杉ニ似リ、蘭方ノ医家此者ヲ葉葉トス とほぼ『遠西医方名物考』に従った記載がある。収載されている図は彩色されている。

④慾齋の門人、鈴木玄道写『薬名字彙』(元治元年)¹¹⁾。sabina (zevin boom) サビナの記載が見える。オランダ名はSevel boomと綴るのが普通であるが、ここではzevein boom と記されている。

⑤『草木図説』木部巻10には数種のサビナが考察されている。まず「イブキ(檜柏)」を *Juniperus Sabina* L. と誤って同定し、同じく「舶来ノサビナ」をこの同属異種とみなし、また「ビヤクシン」をサビナの一種属とも算している。これらは北村によって「イブキ」を *Juniperus chinensis* L.、「舶来ノサビナ」をセイヨウネズ *Juniperus communis* L.、「ビヤクシン」をイブキ *Juniperus chinensis* L.といずれも *Sabina* とは別種であるとみなされている。

これらの参考記載文からも「サビナ」はビヤクシン属植物に近いことが示唆されている。

さて「サビナ」は「セコイヤ」とみなされているので、類似の形態をもつ次の裸子植物を収集した。

[収集資料] *Sequoia sempervirens*, *Taxodium distichum*, *Glyptostrobus pensilis*,

Metasequoia glyptostroboides, *Podocarpus imbricatus*

収集した材料はそのほとんどが日本に渡来の可能性があるものばかりである。しかしどうしても「サビナ」と内部構造が一致する資料に当たらない。それ以後中国を含む東南アジアに出掛けるたびに、それこそ手当たり次第の裸子植物を持ち帰り検索したが、一致するものがなかった。しかし、今までに調べたうちで一番近いのは *Podocarpus imbricatus* であり、ただ葉肉内に存在する異形細胞が「サビナ」には認められないだけであることから、分布による相違も考えられるので、その後はこの種にしばらく比較研究を進めた。その後邑田 仁は、インドネシアのボゴール植物園シボタス分園、広妍は中国広州にて入手の標品について比較検討した結果、「サビナ」と「*Podocarpus imbricatus*」はすべての形態において一致することを明らかにすることができた。

悠斎は『草木図説』木部の巻8に「未詳一種サビナ花戸称」としているが、*Juniperus* とは別属と考えて次のように記載している。「或云舶来ニシテサビナト、或云北国ノ産ナリト、余所見稚木ニシテ、高僅ニ四五尺、葉縦類ノ如クニシテ薄ク、互生密布シ、葉末尖リ、本ハ狭カラズ、流レテ親ク枝ノ両側ニツキテ縦ノ短柄ナルカ如クナラズ、ソノ小ナルコト略日光モミノ如クナレドモ、平扁斉列シテ重複ナラズ、又ソノ新芽ノ伸ル状全ク一家殊標アリテ、ソノ族イカンヲ断シ難ク、偶々葉間一処ニ雄夷アルヲ見テ、未ダ雌夷アルヲ見ザレドモ、雌雄異幹ニシテ縦族ナルモノノ如シ、故ニ姑ク列于此俟後日之考」とモミの類を考えながら同定を差し控えていることから、悠斎自身の観察の鋭さと研究者としての態度を見ることができる。

II. A. Munting's Botanical Illustrations¹²⁾

飯沼悠斎の著作である『草木図説』の成立過程は種々論議されているものの、未だ十分に解明されていないが、17世紀オランダの Abraham Munting (1626-1683) の *Aardgewassen* (*Naauwkeurige Beschryving der Aardgewassen.*, 1696)¹³⁾ が悠斎自身により正確に模写されていたことが発見され、『草木図説』の成立過程を説明し得るものの一つと考えられる。1983年飯沼順二医博の所蔵文書の中にキニホフ著『植物印葉図譜』の写本1冊を含む西洋植物学の模写図を多数発見し、その原著の調査を試みた。これより先、1973年吉川芳秋は吉川自身の所蔵品のなかに飯沼悠斎の西洋植物書模写図1枚があることを公表しているが、原著には触れていない¹⁴⁾。『Munting』について最近まで飯沼悠斎との密接な関係が論じられて来なかった理由として、『Munting』原書そのものが江戸時代にはあったがいつしか失われ、最近まで国内で全く見当たらなかったことが原因の一つで、悠斎の模写図が『Munting』のものと同かったのも、原書が再輸入されて国内で比較研究が可能になったためである。また著名な悠斎研究者である牧野富太郎と北村四郎は、それぞれの『増訂草木図説』と『草木図説』木部の解説の中で『Munting』を全く取り上げなかったことである¹⁵⁾。

遠藤は『吉川芳秋著作集』¹⁶⁾の出版にさいして、吉川所蔵の悠斎翁筆「西洋植物書の植物図模写」のすばらしい

軸装図実物を見て、この図の原書をぜひとも突き止めたいたい思いに駆られた。

この図の写真と、松田清がオランダで購入して持ち帰った古い本草博物書のうちの『Munting』の2種の図書と対照した。さらに、1983年著者らが調査してコピーしておいた飯沼順二所蔵の大型の植物写本のエキゾチックな図と比較した。これらの図は、これまで慾齋が使用したと知られる西洋植物及び薬物書『ドドネウス』『ワインマン』『ホッタイン』『オスカンプ』のいずれでもない『Munting』と結びつくことがわかった。その後、国会図書館の購入本とも比較することができ、一挙に吉川氏及び飯沼順二氏所蔵の模写図の性格が解明されるようになった。

慾齋模写図の特徴

原書と照合できた模写図は、飯沼家模写図220枚と吉川家模写図1枚で、『Munting』原図の91%にあたる総数221枚(238種)である。吉川家模写図は軸装されているが、飯沼家模写図は大判全紙の二つ折本(32cm×23cm)で洋本綴じとした形跡がある。しかし、綴りひもが切れていて本の形態は失われている。図はすべて烏の子紙(雁皮紙、28cm×20cm)を使用し、原書の銅版図を上から毛筆で透写したものである。原図のうち植物分類に不必要な部分を巧みに省略しながら、分類に欠かせない全形と部位を的確に模写している。慾齋の植物分類に対する深い理解を窺わせる。

『草木図説』には「ムン氏」「門氏」などとして『Munting』が6種の植物の同定のために引用されている。アダン・アダン一種・ヒキオコシ・ヌスピトハギ・獅子サボテン・シロヂシヤグラの6例である。『Munting』の図に拠ったいずれの同定も不備であり、牧野や北村によってその誤りは指摘された。『Munting』はリンネ以前の旧式な本であり、花の雌雄蕊や花実などはほとんど描かれていない。その故、リンネ流の分類に適さなかったのは当然の結果といえるが、慾齋がこうした不備を理解しつつ、『Munting』の図に高い信頼を寄せていたことは充分うかがえる。『Munting』の銅版図は、慾齋が西洋植物学の優秀性を認識する上で衝撃的なものであったにちがいない。

『Munting』の模写図を作る作業と『草木図説』の起筆との間に何らかの関連が存在した可能性も思考される。

Ⅲ. 『東莠南畝識』と飯沼慾齋『本草図譜』^{17, 18, 19)}

1995年磯野直秀は、国会図書館の白井文庫で資料を採策中、偶然に『東莠南畝識』^{とうゆうなんぼしん}なる3冊本を手にした。これらには「小野蘭山手摺本」との付記と蘭山の朱筆があり、意外にも素晴らしい動植物の彩色図譜であった。『東莠南畝識』を一覧した磯野は「錦蝶」としてギフチョウが描かれていることに注目し、後日、慾齋の『本草図譜』のギフチョウの図と比べたところ、両図が瓜二であることに気づいた。

磯野の調査によると、『東莠南畝識』の著者は毘留舎耶谷であり、中には享保8(1723)年から寛延元(1748)までの年記があり、3冊に合計467品の動植物が描かれている。そのうち、植物377品、動物90品があり、図はいずれも実写と思われ、綿密ではないが、生物学的特徴をよくとらえている。記文は形態の特徴や花期・結実期などのほか、産地(大半は美濃付近)や写生年月日などを漢文で記されていた¹⁹⁾。

磯野は、慾齋の『本草図譜』が、ギフチョウだけにとどまらず動植物図の大半を『東莠南畝識』から転写していることを発見した。動物では82品を転写し¹⁹⁾、植物では350品を転写している²⁰⁾。つまり『東莠南畝識』の品数のうち、約90%強を慾齋が転写していたことになる。

さらに磯野によれば、転写の際に慾齋が写した品名の大半は、蘭山が『東莠南畝識』に朱書した名称であり、また、慾齋の『本草図譜』の朱書も蘭山の筆跡であるとのことである。

慾齋の『本草図譜』は、草部7巻と木部、虫部・介部、魚部、禽部・獣部各1冊の11巻からなる本草式の図譜で

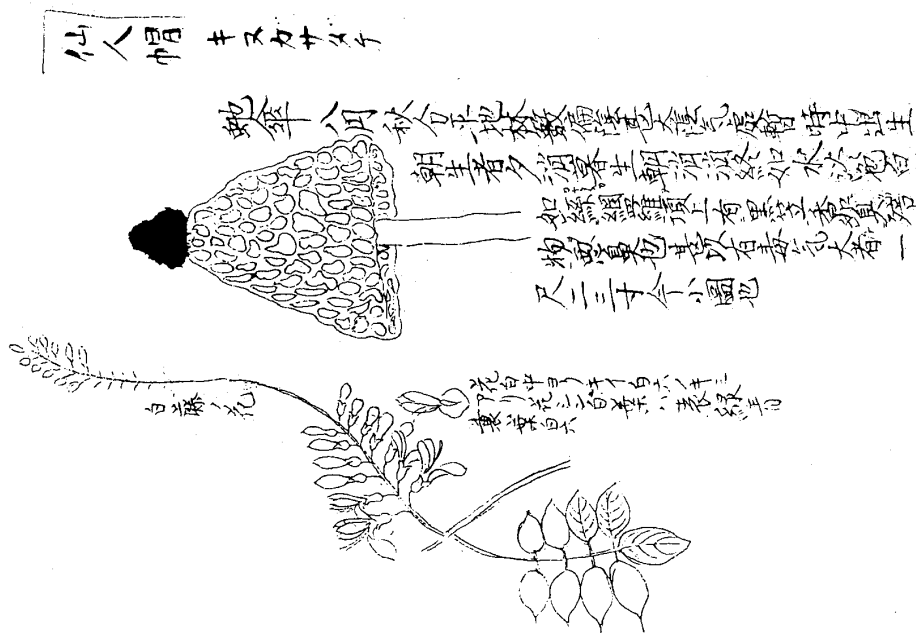
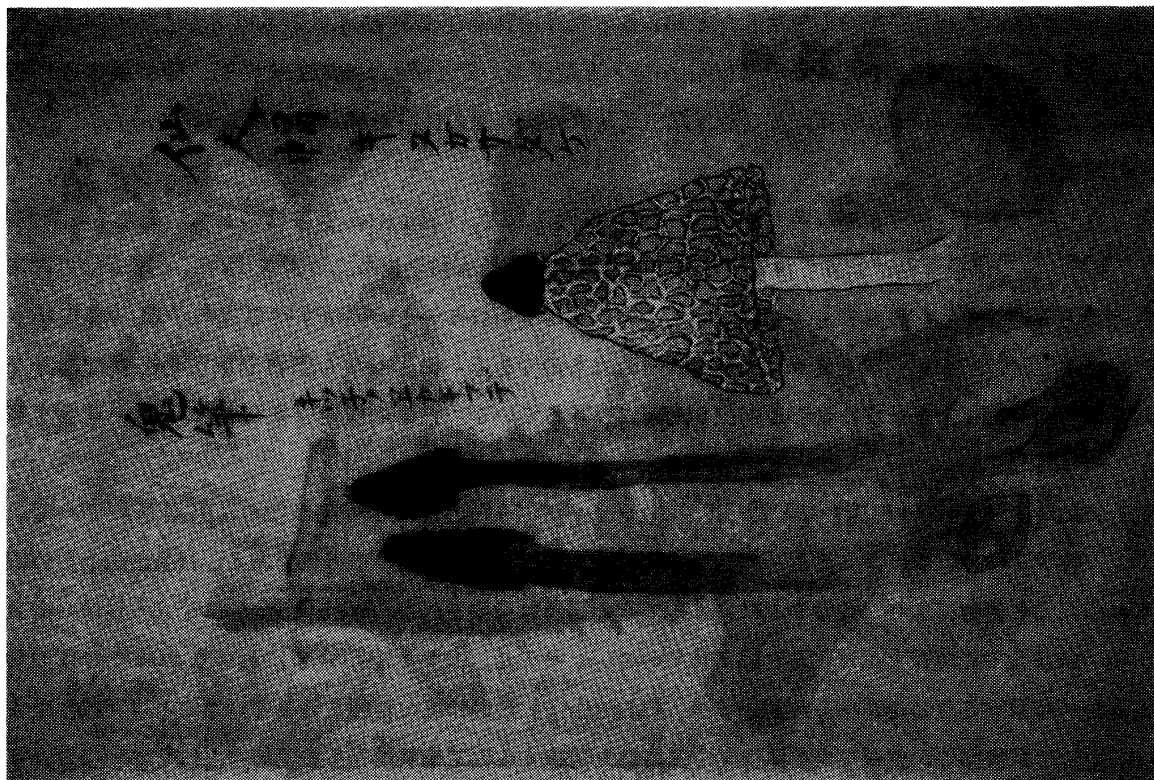


Fig.1 仙人帽キヌカサダケの図 左：「東莨菪南畝識」の図、右：「草木図説」の図（「草木図説」の鬼筆キツ子ノエカキフデは小野蘭山の加筆であるが、「東莨菪南畝識」には図がないので、他の元本によるのか自筆かは不明）



Fig. 2 淫羊藿イカリソウの図 左：「東莠南畝識」の図、右：「草木図説」の図

(数種の図からイカリソウのみが模写されている)



Fig.3 黄芩ハシリドコロ 左：「東莨菪南畝識」の図、右：「草木図説」の図

ある。これまで、これは『草木図説』に比べて旧式であるため、愋齋の初期の本草研究の成果であると信じられてきた。しかし、磯野の発見によって、愋齋が模写をするほどの先行図譜の存在が浮かび上がってきた。このようにして、模写の時期や過程は定かでないが、蘭山の介在が明らかになった。

『東秀南畝識』の著者毘留舎耶谷は「西濃沢田真泉」とあるので、養老郡養老町沢田の真泉寺の住職だったとみられるが、その出生や事歴は未詳である。『東秀南畝識』およびその著者の解明は美濃地方に於ける本草図譜の成立や発展を考察する上で極めて興味深い研究課題といえよう。(Fig.1~4)

謝 辞

小論は、愋齋研究会においてなされた研究あるいは報告にもとづいたものである。同会は創設以来、本学内に事務局を置き、本学の諸兄による直接間接のご支援によって、かなり特殊な史的研究が展開できた。会員の皆様ならびに本学の諸兄に謹んで御礼申し上げたい。

引用文献と注釈

- 1) 愋齋研究会だよりの主な目次 水野瑞夫：愋齋研究会の発足にあたりNo.1 (1982・6/15)、飯沼俊雄：梅亭飯沼本家の歴史についてNo.4 (1982・9/23)、井波一雄：愋齋と東海地方の植物No.9 (1983・2/6)、安江政一：『大黃私考』についてNo.10 (1983・3/20)、高木典雄：愋齋とコケ植物No.11 (1983・4/20)、青木一郎：『叔墨児脈論』についてNo.12 (1983・5/8)、遠藤正治：愋齋と伊藤圭介の交流とキニホフ『植物印葉図譜』についてNo.16 (1983・9/20)、井波一雄：現今幻となった『草木図説』の植物二三No.17 (1983・10/15)、遠藤正治：三枚目の「ノウゼンハレン図」No.24 (1984・8/1)、井波一雄：『草木図説』に画かれたラン (其一、二、三) No.28,29,31(1985・5/20,8/1,12/8) 遠藤正治：愋齋とツバメオモトNo.33 (1986・6/1)、安江政一：『大黃私考』と『日本大黃考』についてNo.38(1987・8/1)、矢部一郎：本草学史における榕菴と愋齋・西洋植物学の受容一No.42 (1988・8/1)、水野瑞夫・遠藤正治：『草木図説』の印葉図についてNo.43 (1988・11/1)、山崎 敬：飯沼愋齋の標本について I、II No.45、46 (1989・5/1,8/1)、安江政一：近代薬学導入期における東海地方の学者の貢献No.47 (1989・11/1)、水野瑞夫・遠藤正治：飯沼愋齋の標本『サビナ』No.51 (1990・11/1)、水野瑞夫：ケイモウショウ鶏毛松No.52 (1991・2/1)、井波一雄：愋齋の生薬における思想No.57 (1992・5/1)、河村典久：我が国の印葉図譜についてNo.59 (1992・11/1)、後藤尚夫：江戸中期における木曾薬種と本草学者No.64 (1994・2/1)、遠藤正治：『ミュンチング』の愋齋模写図の発見No.65 (1994・5/1)、後藤尚夫・田中俊弘：『本草図説』にみられる人参No.68 (1995・2/1)、河村典久：キニホフ『植物印葉図譜』についてNo.69 (1995・5/1)、磯野直秀：『東秀南畝識』と飯沼愋齋『本草図譜』動物部No.72 (1996・2/1)、水野瑞夫：伊吹山の薬草・植物年表No.73 (1996・5/1)、河村典久：伊藤圭介と印葉図『植物図説雑纂』
- 2) 飯沼愋齋生誕二百年記念誌編集委員会編、飯沼愋齋、(1984)
 主な目次、遠藤正治・北村二郎・水野瑞夫：飯沼愋齋の生涯
 [飯沼愋齋と植物学] 矢部一郎：『草木図説』の序文解説、木村陽二郎：ナチュラルリスト・飯沼愋齋、北村二郎：飯沼愋齋と岩崎灌園、木村有香：飯沼愋齋と楊柳、山崎敬：飯沼愋齋製作標本寸描、湯浅浩史：愋齋遺稿の穀、菜、果、高木典雄・川瀬仙吉：飯沼愋齋遺稿にみられるコケ植物、奥山春季：『草木図説』に図説されたタイレンサイに就いての一考察、福原裕子・邑田仁・水野瑞夫：飯沼愋齋植物資料拾遺、井波一雄：飯沼愋齋の足跡と採録植物の現況考察、村田源：飯沼愋齋の植物画について、岩槻邦男：飯沼愋齋と近代植物分類学

[飯沼慾齋と蘭学医学] 青木一郎：飯沼慾齋-医学の人-、齋藤信：飯沼慾齋とオランダ語、片桐一男：『本草千種』と「千吉文庫」をめぐる蘭方医たち

[飯沼慾齋と本草] 松島博：飯沼慾齋と伊勢本草学、吉川芳秋：尾張本草学と飯沼慾齋、安江政一：飯沼慾齋と『大黃私考』、米田該典：飯沼慾齋著『草木図説』中の生薬記文雑感

- 3) 水野瑞夫他，飯沼慾齋の「未詳一種 サビナ花戸称」の標本について、薬史学雑誌25(2)、121~127 (1990)
- 4) 慾齋研究会だよりの表紙、No.6、pp.1 (1982)
- 5) 飯沼慾齋生誕二百年記念誌編集委員会編，飯沼慾齋，pp.60-63 (1984)
- 6) 遠藤正治，住田満也氏所蔵の慾齋書簡の紹介，慾齋研究会だより，No.31，pp.6-7 (1985)
- 7) 北村四郎編注，草木図説，木部下巻，pp.697，保育社 (1977)
- 8) 山本亡羊鑑定・同裕室輯録，読書室物産会目録，巻43、西尾市教育委員会岩瀬文庫蔵
- 9) 群芳軒編，天保度後蠻舶来草木酪書，(安政6年3月)、白井光太郎著，本草学論攷，第3冊、pp.80-86、(1934)
- 10) 馬場克昌著，群英類聚図譜，前78冊、武田科学振興財団杏雨書屋蔵
- 11) 鈴木道写，薬名字彙，(元治元年)、犬山市文化資料館蔵
- 12) 水野瑞夫他，ミュンチング著『アールドゲワッセン』の飯沼慾齋による模写図について、慾齋研究会だより，No.43、pp.52-69 (1994)
- 13) Abraham Munting, Naauwkeurige Beschryving der Aardgewassen. Leyden, Pieter van der Aa : Utrecht, Francois Halma, 1696, 243plates
- 14) 吉川芳秋，現代医学、21(1)、127(1973)
- 15) 遠藤正治，慾齋研究会だより，No.65、pp.1-7 (1994)
- 16) 吉川芳秋著、木村陽二郎・遠藤正治編，医学・洋学・本草学の研究，八坂書房，(1993)
- 17) 磯野直秀，東莠南畝識，18世紀前半の動植物図譜，慶応義塾大学日吉紀要，No.18、61-68 (1995)
- 18) 磯野直秀，最古のギフチョウ図一埋もれていた博物図譜『東莠南畝識』との出会い，月刊百科，平凡社，No.394、22-26 (1995)
- 19) 磯野直秀，『東莠南畝識』と飯沼慾齋『本草図譜』動物部，慾齋研究会だより，No.72、2-7 (1996)
- 20) 磯野直秀，日本博物学史覚え書Ⅳ、慶応義塾大学日吉紀要，No.21、28-54 (1997)